

V.V.Беляев.

カラマーゾフの兄弟におけるグルーシェニカの人名研究

1, グルーシェニカと植物界

極めて重要で、よく使われ広く知られている「一本の葱」の伝説はグルーシェニカによってアリョーシャに「一本の葱」の章の中で話されており、一人の農婦の言葉とともにドストエフスキーによってえがかれていて(参照15, 572), 読者を、炎の池から天国へと葱を伝って運ぶ道のように、いかに罪深い世の中から神のもとへと教会の丸屋根を戴いた正教会を伝って登っていくかという思索へと導くのである。長篇のこの話や、他の多くのエピソードのような寓話は読者をとくにもしもそのような言葉がたびたびテキストに出てきたような場合にはそれらの目に見える、ありふれた具体的現象に満足せずに、一本の葱といったような言葉に対する潜在的な思索の探索へと扇動するのである。

V.A.Богдановの言葉によると、「反復と類似は…破棄できない組織的な生活の完全性に関する全てのレベルの計画と思索における、ある程度生活の全てのレベルの中で秘密の相互的結びつきと相互制約性となった支配的な作者の思想を読者の意識に対して浸透させる準備をするものである。」しかしながら我々の観点によると読者に著者の思考を届けるのはこの繰り返しと類似それ自身ではなく、言葉や、名前が反復する見方の存在するすべての無尽蔵の意味の豊富さの中なのであり、最初の観点ではあたかも偶然のありふれた、意味の無いようなものなのである。

「グルーシェニカ」という言葉は長篇の中で葱という言葉よりも多く発せられている。しかしながら象徴的なその意味は、一まさしくその高い特殊性の結果一決して読者の目には飛び込んでこないのである。すぐさま指摘しておきたいのは両方のこの言葉が食用の果物と野菜を意味する卑小形の女性形の植物界の言葉であるということである。この言葉(グルーシェニカ)の具体的な意味は読者の意識にはなく、ミーチャの無意識下の言葉において権威付けを行なうのである。「お前にも教えてやるが曲線美なんだ。あのグルーシェニカの悪女は、肉体が素晴らしい曲線美で、それがかわいい足にもあらわれているのさ。」というのも、梨はリンゴやプラムや、さくらんぼや、モモなどとは異なり、最もその輪郭が曲線的なものである。(ちなみに言うておけば、ギターは輪郭と言うものもその曲線美において梨あるいは胴体の輪郭を思い出させるところがあり、だからこそスメルジャコフとマリヤ・コンドラーチエブナの章では偶然でなくこの名称がついているのである。「ギターを持ったスメルジャコフ」)

グルーシェニカの名前と梨(食べられる果物)との間の結びつきは長篇の詩学の要素としてドミートリー、フォードル・パープロヴィチやスメルジャコフの行動を「闇の中で」や「三度目のスメルジャコフとの最後の面会」の中で描かれた部分を新たに説明する事を許すのである。

この夜、ドミートリーとフォードル・パープロヴィチー特別最後の一は、精神的にも肉体的にも極度に疲労困憊し、緊張し、ひどく興奮していた。よく知られているのは、このような状況において見られる人間の神経のシステムが、あらゆる条件性と複雑性に反応するのではなく、あたかもそれに反対するかのように、単に最も単純な要素的な苛立ちに反応するということである。まさしくだからこそミーチャは照らされた家の窓の前で絶えず彼の無意識によって木立や茂みの道を指し示していたのだった。「木立や茂みを迂回し、長い時間をかけて歩いた…窓のすぐ下に、こんもり茂った、大きな、背の高いニワトコとスイカズラの茂みがいくつかある…やっとな茂みにたどり着き、そのかげに身をひそめた。彼は茂みのかげの暗が

りに立っていた。茂みの前半分は窓からの光に照らされていた。」(14, 353) しつこい言葉の繰り返し、木立、茂み、茂みの、茂みで—これらは決してドストエフスキーの「文体的な欠陥」ではない。というのも、ミーチャはグルーシェニカ(梨)を探していたので、だからこそ彼の関心はまさしく庭にある植物に集中されたのだった。

先を読んでみよう。『「スイカズラの実、なんてきれいな赤だ！」なぜか分からないが、彼はささやいた。』彼自身なぜかわからなかったし、わかることも出来なかっただろう。しかし作者であるドストエフスキーは全てを知っていたのである。この最小限のディテールの機能はふたつある。事情に通じていない読者にとっては、このレプリカは流される血を下準備するものであるし、犯罪におけるミーチャの意図の確信を補強するものである。自分の父親の血を流す事はなかったミーチャ自身は、同じ原因によってスイカズラに強く反応している。彼はグルーシェニカを探している。しかし彼の疲れきった脳ではグルーシェニカと梨のイメージがごちゃ混ぜになっており、だからこそ赤く輝いているスイカズラの果物が、その曲線美とともに、あたかもそれ自身でミーチャの眼の中に飛び込んでくるようなのである。

グルーシェニカの搜索は続く。「彼は窓に近づき、爪先立ちしてみた。フォードルの寝室全体が手にとるように目の前に浮かび上がった。フォードルのいわゆる『シナ』の赤い屏風で横に二つに仕切られた、小さな部屋だった。」(14, 353) この一節では名詞の卑小形での圧入が注意を促している。「爪先、寝室、小さな部屋、屏風」と言ったふうなのである。同様に「手のひらに取るように」といった語群は何らかの客体の小さな程度を表している。このような卑小形の意味の圧入は、この章では、引用された節の前にも後にもない。それは勿論、ここにおいても偶然ではない。ミーチャは視線によってグルーシェニカを探し、だからこそそこで見える全てはドストエフスキーが語の選択によって伝えた彼の意識の中で和らぐのである。

無知な読者にとっては屏風の赤い色は、今にも流れるような血のシグナルの一つでしかない。屏風を何よりもまず視覚的な障害として知覚しているミーチャの脳には、恐らくそのような連想が働いたのである。「赤いシナの…もうひとつ卑小形が…これは全く(屏風ほどではないが)リンゴみたいだ!」そしてグルーシェニカ(小さな梨)を探しているミーチャは、思索的な言語の中で、連想的な比較をするのである。

『シナのものか』ミーチャの頭にこんな思いがちらと浮かんだ『…あの屏風のかげにグルーシェニカがいるんだ』。「リンゴ」という言葉はほのめかされてはいるが、すぐさまこの直接殺人が行なわれるこの章では登場しない。それはもっと後のスメルジャコフとイワンとの会話の中で出てくるのである。(15, 65)

ミーチャだけではなく、フォードル・パーブロヴィチもグルーシェニカについて考えており、庭や茂みの中に彼女を想像で探している。「そして老人は、庭への出口のある右手のほうをのぞき、闇の中で見分けようと努めながら、窓から落ちそうになるほど身を乗り出した。」(14, 354) スメルジャコフは殺人の詳細をイワンに伝えながら、回想している。「見ると左手の庭に面した窓が開いている。…私はささやきました。『ほら、あそこに、窓の下にいらしてます…茂みに隠れていらっしゃるんです…ほら、いらっしゃるじゃありませんか、茂みのところに。笑ってらっしゃいますよ、お見えにならないんですか?』」(15, 64) スメルジャコフの会話の中で庭と茂みに関する幾度とない回想は最も単純な刺激と言う役割を果たしており、その結果として茂みとグルーシェニカ(梨)は終には連想の回路を閉じ、フォードル・パーブロヴィチは「ふとそれを信じて、窓から身を乗り出すのである。」

**コメント [R01]:** シナの赤いものという言葉がリンゴを連想させると言う研究者の主張である。

とてもわかりやすくフォードル・パープロヴィチの反応はもっとも単純な刺激へと向けられていて、そのディテールを表している。彼は殺人を目論んでいたスメルジャコフを恐れていて、彼に扉を開けようとしなかった。スメルジャコフは回想している。「ドアを開けるのを恐れていらっしやるんです。これは俺を怖がっているんだな、と私は思いましたね。こっけいなことに、突然、例のグルーシェニカがいらしたという、窓枠をたたく合図を、旦那の目の前でやってみようという気になったんですよ。ところが、私の言葉は信用なさらなかったようなのに、私が合図のノックをしたとたん、すぐさまドアを開けに走ったじゃありませんか。」(15, 64) 本能はスメルジャコフに確実な戦法を与えた。フォードル・パープロヴィチが待っていて、彼の全ての関心が集中していた合図を提示する事は、すなわち低劣なそれに伴う状況というのが、無教養なスメルジャコフの意識としても残っていたと言う事である。

一方実際の殺人は果物についても樹木についても考えはしない。スメルジャコフはこのエピソードの中で無機物とのみ接触している。窓枠(条件的なノック)、扉(解放)。鋳物の文鎖(殺人)、紙と包み紙(お金、包装紙、赤い一再び赤い色!ーリボン)「私はまっすぐ、あの洞のあるリンゴの木のところへ行きました。あの洞をご存知でしょう。わたしはだいぶ前からあれに目をつけていて、あの中にぼろ布と紙をしまっておいたんです。…」(16, 65)。殺人の果実は、一これはリンゴの枝になっている生きた果実ではなく、無生物の金、死んだ植物によって隠されているものなのである一紙とぼろ布によって汚れた洞に用意されているものである。

「カラマーゾフの兄弟」における言語がそれによって驚くほど満たされている思索の解放は、С.Цвейгの言葉の正当性を立証している。その言葉とはドストエフスキーを原本で読んだのではなく、つまりは彼のテキストを偶然に19世紀の終わりから20世紀初頭の並みの翻訳で読んだものであろうが、ドストエフスキーの詩学の重要な特殊性を捉えている。「世界の文学はドストエフスキーの言葉ほど表現豊かな作品を知らない。言葉の秩序が象徴化され、文章の構造は特徴付けられており、何も偶然的なものも存在しない。それぞれ一つ一つの文体は不可欠であり、それぞれが一つ一つの音を奏でていて、それぞれのポーズや、繰り返し、息遣いや、言い違いが存在し、発せられた言葉の裏側にはいつも圧倒的な反響が聞こえてくるのである。これはそれは隠された魂の満ち潮の波を打つ。ドストエフスキーの登場人物の言葉からあなたはそれぞれの登場人物が話している言葉だけではなく、彼が話したいのだが黙っている事も聞こえてくる…小さな、つかの間の、偶然の特徴一ひよっとすると不必要なもののような一も、100ページ後には説明づけられるのである。物語の表面下では、隠された接触や、広まる噂や、交換された秘密の反射作用が存在するのである。」

## 2, ドストエフスキーのグルーシェニカとウスペンスキーのグルーシャ

我々に提起されたグルーシェニカのモデルと植物界との関連性についての仮説は、作者の実人生から、この人物の原型となった他の人物達も含めた他の指摘に対する主張といったものでは決してない。しかしながら、我々の意見では、「梨」の持つイメージ・シンボルというものは、「葱」や「童」や、「大地」等のイメージ・シンボルと並んで入るのではないかと言う事である。グルーシェニカのモデルに文学的類似をしているものについて触れておくと、ニコライ・ウスペンスキーの「グルーシュカ」が「カラマーゾフの兄弟」と並んで、我々の興味を失わない。比較と言うものは、以前は我々の見方では、注釈者や研究者達には受

コメント [RO2]: 紙のこと

け入れられてはいなかった。

知られているのは、「グルーシュカ」を含めたウスペンスキーの物語の作品集が1861年の『ブレイミヤ』の中で書評に描かれており、つまりはドストエフスキーによって確認されていると言う事である(19, 178-186, 334)。物語のヒロインのモデルは商人の娘である、アグラフェーナ・バシーリエヴナ・ムラーシュキナであり、ニックネームがグルーシュカで、ある本質的なディテールが「カラマーゾフの兄弟」のグルーシェニカのモデルを先取りしている。この両者に特有なものとしては、男性に対する愛を注ぎ込む才能と、そこから個人的な利益や、イニシアチブや、機敏さや、独創性を恋愛での事件やまやかしの中で引き出す能力である。自分勝手に男性達を振り回す能力は、同時に完全に満足な時を与えているわけではない。二つの引用を比較してみよう。A) ウスペンスキーの語り手：「私たちの間には特別な事など何もなかった。私は彼女のところに一度や二度ならず旅行に出かけた。いわば、時間を無駄に使ってしまったのだ。愛撫のほかには虚無から虚無へとばらまくものなど何もなかった。」B) ミーチャーアリョーシャ「ところがかっこいい男が望みを遂げたと思うだろ？とんでもない、…拜んで、キスして、それでおしましさ。」(14, 109)

ウスペンスキーのグルーシュカに対する語り手の感情の中で、彼のライバルとなっているのがよそから来た将校で、初夜の後に彼女から逃げてしまったのである。それはいくらかミーチャの恋愛のライバルである以前の男を思い浮かべせる。二人のヒロインの容貌の記述にもいくらか類似の要素がある。「彼女は上等なお嬢ちゃんだ、全ての頬の赤らみといい」、「血色のいいむっちりとしたロシア美人」。ウスペンスキーの登場人物はグルーシュカにこう言う。「まず第一に、一ペテン女だ」「ごみみたいな性格だ」「俺をからかっているんだ」「俺を誘惑しようとしているんだ」「なんてずる賢い女だ一滅多にいない」などである。そしてもう一人の主人公であるミーチャは似たような表現で評価をしていた。同様に、フォードル・パープロヴィチはアリョーシャとの会話の中で彼女を6度グルーシュカと呼び、2度グルーシェニカと呼んで、こう話している。「人間てのは、そういう性格を授けられているものなんだ、なんでも反対にやりたいんだよ。あの女の気持ちくらいお見通しさ！」(14, 158)

ウスペンスキーの物語の中では、恋愛関係を、グルーシュカだけではなく、本能的な厚かましさを持った他の登場人物達もが、何千にもなる物質的な計算と結び付けている(プロポーズの場面を参照して頂きたい)。同様のモチーフはグルーシェニカを巡ってのフォードル・パープロヴィチとドミートリー・カラマーゾフの葛藤の中でも起こりうることである。

上述した事を考慮に入れると、ウスペンスキーのあまり大きくはない、大雑把な話がグルーシェニカのモデルの創作にあたって一つの源泉となったと言う事である。この二つのモデルの間の類似点のもう一つの間接的な証拠は、ウスペンスキーからドストエフスキーの物語への、一連の書評である。

**В.В.Беляев.Имя грущенька в Братьях Карамазовых как антропоним // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. достоевский Материалы и исследования. Ленинград. Изд-во Наука. 1974. том10.стр.176-181.**